

漢文指導授業に就いて

著者	田波 又男
雑誌名	漢文學會々報
巻	3
ページ	77-82
発行年	1935-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146676

漢文指導授業に就いて

前がき

漢文學會々報第一號内野先生の漢文教育に關する諸問題の中、教授時間數の問題に於て「初年級では廢止したが、二年より五年に至る間の時數を増減を如何にすべきか」又施行範圍の問題に於て「實業學校及び高等女學校等にも課す可きであるか否か」等の項目を擧げられ、最後に諸君の研究に依つて明快な解決を下されることを期待するわけである。と結んで居られる。私は先生の擧げられた諸問題を拜見し、漢文教授の經驗淺きにかゝらず。又先生の懸念せられて居る實業學校の漢文科受持教員の一人として聊か鄙見を述べて先輩諸兄の神批判を仰ぎ、今後の研究に資したいと思ふ。

一、本校に於ける漢文指導授業の實際と其の
効果について

田 波 又 男

(イ)指導授業とは何か
本校に於ける指導授業とは言葉を換へて言へば上級生の下級生指導學習のことである。その綱領として次の如く説明して居る。

指導學習とは各學年の主要學科（現在主に漢文、英語）に亘りて上級生が下級生に對して行ふ個人的指導にして學科に對する相互研究と上下兩者の和親融和をはからんとする知育並に訓育を主眼とする施設なり。教ふることは直に學ぶことなり、智識の適確なる把握は指導の實際に當りて得られ、且その被指導者が得る知的效果の偉大なるは勿論なるも、本校特色の一なる上級下級生間の尊敬と愛撫親和協調の實はこの指導學習が齎す一側面なり。（學校一覽）
教育特別施設）

(ロ)指導授業の必要
語學の學習程難しいものはない。殊に中等學校に於ける

漢文、英語は初年生の苦手とする所である。随つて其の教授法に就いても種々論議せられて居るが、未だに解決したものとも思はれない。一般に國漢教授の方法は

(1) 先づ第一は文字語句を忽にせず。形式の徹底に力め然る後内容の點檢に入りその教授を進めようとするもの。

(2) 次は形式をそくくに片付けて置いて直ぐに内容の吟味に這入り所謂鑑賞批評の方面に猪突せんとするものとの二様に分れる。

従來國語に於ては後者に陥り易く漢文に於ては前者に陥り易かつた。何れに偏するのよくないことと思ふ。中庸の道の難きを痛切に感ずる次第である。然し何といつても漢文教授に於いて文字語句を離れて鑑賞批評の方面のみに力を入れるのは危険である。殊に下級生の漢文教授に當つてはこの感を深うする。狩谷拔齋の歌に

文字の關まだこえやらぬたび人は

みちの奥をばいかで知るべき

とあるは此の間の消息を物語つて居るものと思ふ。然し時間中それ許りやつて居つては生徒は益々漢文は難しいものと思つて了ふ。本校が少い時間（一、二年一週二時間、三

年以上一週一時間）で効果を擧げるにはこの指導授業により漢文智識の正確なる習得を期さねばならぬ。

(ハ) 指導授業の實際

現在漢文指導授業は一、二年生のみで一週一回木曜第一時限が當てられて居る。始業前二年各組の級長は職員室入口の揭示板を見ることになつて居り、そこに行くとき「本日漢文指導 二十一課頼山陽傳 訓點書取」等の指示事項が揭示されて居る。従つて週によつて暗誦、解釋等のこともある。一年生徒は朝禮後二組に分れ一組は二階二年生の教室に行き机を並べて指導を受ける。他の一組は二年生の來るのを待つて其の指導を受ける。この際二年生は一年の時習つた教科書並に漢文ノート持参一年生は現在學習しつ、ある教科書並に指導帳を持参することになつて居る。指導帳には其の日練習すべき二十一課頼山陽傳の白文が書いてあり、尙其の餘白に解釋書取等を書く様になつて居る。各教室には各組主任が自己の教室の指導監督をなし、二年漢文受持教員は各教室を巡回質問に應じその總監督をすることになつて居る。指導授業の際注意すべきことは左の諸點である。即ち第一は生徒の組合せであつて大體従來は身長

順によつて一年生の一番は二年生の一番と机を並べることになつて居るが、一樣にかくすることは却つて其の効果をうすくする。よつて一年生の成績の悪い者性格の良くない者には二年生の成績の良い者善良なる性格の持主と組合せる必要がある。これは指導授業が單なる知育のみでなく、訓育の上を考慮しての結果である。第二は豫定指示事項と時間の問題である。即ちこの時間は第一時限といつてもこの中には約十分の朝間體操並に約十分の朝禮訓話が含まれて居り、殊に校長の訓話が長くなると豫定の十分間を超過することが多く、實際の指導授業は約三十分乃至二十分位となることがある。この二十分間で豫定の訓點書取まで出されない時は今日に主に書取を練習なさいとか訓點の方だけやりなさいとか注意すべきである。指導授業は大體に於て復習が主であるが校長訓話がなく、時間の餘裕のある場合には次の課の豫習として讀方位は二年生に習はせても差支へないことになつて居る。第三は時々學級主任或は巡回の教員は簡單なる考査をする必要がある。これによつて二年生の指導振り或は一年生の學力を驗するのである。

(二) 指導授業の効果

指導授業の目的要領に就いては最初に擧げて置いたが果して其の目的を達して居るか否か次にその點を記して見たい。

1. 知育上、學科に對する相互研究は所期の目的を達して居るものと認められる。即ち一年生は指導授業を受けるためにには指導帳をつくり漢文時間中説明の不充分な點に就いて疑問を持つて居り、二年生は一年生を指導するには相當な準備即ち復習をして置かねばならぬ。殊に成績の良い一年生を指導することもあるから大いに勉強せねばならず、一、二年生共自己の學力を知る最も良い機會である。この個人的指導は成績の悪い一年生にとつては正に家庭教師について居る様なものであつて、相互研究の結果相當議論して分らない點を先生に質問するのであるから智識は益々正確になるわけである。教學半(書經說命)教學相長(禮記學記)の言を其のまゝ實行して居るといふべきである。

2. 訓育上、上下兩者の和親融和の目的も相當達せられて居るものと思ふ。學校一覽には知的効果の偉大なるは勿論なるも本校特色の一なる上級下級生間の尊敬と愛撫親和協

調の實はこの指導學習が齋す一方面なりといつて居る位、實に見るべきものがある。具體的な例は後に擧げて居る生徒の感想文を見れば大體分ると思ふ。唯こゝに注意すべき點は朝の最も頭のよい時間を使つて指導學習をなすのであつて、短時間の中に最大効果を擧げねばならぬのであるから、學科以外の無駄話を嚴禁し喧騒にならぬ様に組主任は監督せねばならぬ。

(ホ)指導授業に關する生徒の感想文

漢文指導授業に就いて

一C 齋藤 良雄

此の學校に入學してより最早三ヶ月を経た。入學式の時校長先生がいはれた御言葉の中に「他の學校で大方ないと思ふが此の學校では上級生が前に手を出して下級生を導いて居る」との話に僕は大いに感激した。五月第二木曜日より二年C組の生徒が何にも知らない僕達を導いてくれることになつた。その時僕はどんな人だらうと思ひおぼく二階の二C教室に参りました。ところがどうでせう僕を教へてくれる人は會田君といふ級長をして居る人なのです。僕が會田君の傍に机を並べますと、會田君は僕に向ひ「第一課を讀んで」と初めの言葉を發せられました。何となく僕

は嬉しかつた。僕がまちがつたり又分らないと「どれ」といつて直ぐ僕に教へてくれる。僕はこのことを母にお話したら母はよくその人にしつかり聞いて覺えるのだよといはれた。

同

一C 立石 賢三

二年生の平岡さんが親切に指導して下さるので僕は一週間の中でこの時間が一番好きだ。この學校に入つてから漢文は難しくて分らなかつたので一番いやな學科だつたが、こんなに好きになつたのは平岡さんが親切に指導して下さつたお蔭である。僕も一生懸命になり平岡さんも一生懸命になつて初めてよい結果が得られるのだ。これから一生懸命になつて其の恩に報いよう。

同

一C 村岸 唯作

漢文指導の時間は大變面白い。指導の時習ふと良く分つて、先の方まで讀方を教へて貰ふので漢文の時間よく讀めて愉快だ。初めの時は少し窮屈であつたがもうそんな氣がしないで先生に教はるより何でも聞けるから良い。他の時間ばさうでもないがこの時は少し時間が足りないと感じる事がある。

同

一C 大塚 繁雄

僕の指導者は大そう真面目な人です。僕がインキがなくて困つて居ると直ぐインチキを出してくれたりして一生懸命になつて教へてくれる。僕はこの高橋さんを見と思つてどこまでも信頼して居る。又僕が二年生になつたら高橋さんの様に真面目に一年生を教へてやらうと思つて居ます。その時一年生から質問されても何でも分る様に又丁寧に教へられる様に勉強しなければなりません。

指導者の立場より

二C 伊藤 慶一

二年になつて自分が指導する立場になつて初めて指導授業といふものを理解することが出来た。即ちそれは一年生より質問されて自分が一年生の時習つたことを一年生に教へる。これで復習にも實用にもなるわけである。指導の目的は大體こゝに置いてあるのではなからうか。僕に指導を受けてゐる一年生は餘り出来るとも云へない。それでもしつかり指導すればよくなることだらう。それは指導者の指導一つによるもので、責任を以て指導せねばならぬ。

同

二C 高野 利雄

僕は指導の時間に一年生から質問されると分らないこと

もないことはないが、一年の時のことを思ひ出すと直ぐ頭に浮ぶ。今や忘れさうになつたものを思ひ出すことはそれによつて自分の智識をはつきりすることが出来る。

同

二C 山田 顯道

去年までは指導を受けるだけであつたが、今年からは一年生を教へるのである。教へるのは唯それ許りでなく自分を反省さしてくれるのに最もよいものだと思ふ。指導時間に先づ白文帳をとつて見る。きたなく大きく書いてある。一年の時の自分の白文帳を思ひ出す。指導帳のつけ方もきたない。少しはきれいな自分の白文帳を見せてやつた。そして又注意もしたが直ぐにはなほらない。自分からよくする様になるのを待つてゐる。

結び

以上は漢文科を自由に課せられて居る商業學校に於ける一試案であるが、中學生よりも科目の多い負擔の多いのに不拘四年五年になれば相當實力が付き、論語孟子等を読みこなすことの出来るのもこの一二年生の時の漢文指導授業が與つて力あるものと思ふ。要するに指導授業は精讀主義

に基き注入主義、詰込主義を排する開發教授法ともいふべきである。漢文教授に當つては論語述而篇、悱憤の章子曰、不憤不啓。不悱不發。舉一隅而示之、不以三隅反、則不復也。

を熟讀含味すべきであつて、指導授業に當つても最も適切緊要なる言と思ふ。又漢文指導授業は教授法と謂ふよりは學習法であつて、大いに生徒の自發自動に俟たなければならぬ。この點は中庸の博學審問章。

博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。

の博學、審問、慎思、明辨、篤行の五階段を實行するに最も適切なものと思つて居る。然し以上述べた點は、その理想とする所であつて、その實現は中々困難で今後共大いに努力したいと考へて居る。何卒諸兄の御指導を仰ぐ次第である。

(因に本稿中本校とは筆者田波氏の奉職校東京府立第三商業學校をいふのである)